



根本順吉 著

気象の周辺

玉川大学出版部, 1978, B 6 版, 200頁, 880円

著者は、気象庁の予報畑で40年近く実践的経験を積んだ後、現在、世界気候診療所を開設して気候の寒冷化傾向を警告するとともにその解説書を世に送り、気候変動に対する一般の関心を高めた赤ひげとして著名な人である。著者はまた、科学の解説や科学史・博物誌の論文など幅広い文筆活動を通じて既によく名の通った人でもある。本書は、そういう仕事の中から特に、気象学の周辺に関心を寄せた随想的文章を集めたものであり、著者の豊かな知識や持ち前の見識などが窺える文集になっている。

本書の内容は4つの章で構成されている。第1章の「最近の異常気象と気候変動」は、高校地学の教材として書かれたもので、現時点でのこのトピックに対する一つの理解がまとめられている。第2章の「気象とその周辺」では、気象学にかかわる周辺領域の問題についての著者の見解と姿勢とが示されている。そのテーマとして、医学や環境、民俗、戦争、防災、歴史、芸術、農業、地理、教育など多岐にわたっている。また、気象用語のうち著者の気に障る用語（たとえば巻雲と絹雲）に

ついても触れられている。第3章「気象を見る眼」は、気候誌のテーマ6項目に関するノートである。第4章は著者半生の回顧録で、気象事業に従事してきた戦中頃からの経過が記述されている。

さすがに経験に富んだ気象家の文章らしく、気象に関する表現は平易でやわらかく、話題の選定にも余裕がみられる。しかし失礼をかえりみないで言うと、第2章の評論的随想においては全体に精彩が欠け、考案も平凡になりがちである。著者自身、説教調になったと反省しておられるが、必ずしもそれが原因ではないように思われる。

ところが、第3章になると著者の面目は躍如する。その中の「山の音」では、山で耳にするさまざまな音がまとめられていておもしろく、また富士山の気象研究家として知られた山本三郎氏の山の音の経験をつづった長文の手紙も引用されている。同氏は突風と突風とがぶつかる音が聞こえると記しているが、こういう表現は普通の気象学しか知らない評者などをうろたえさせるに十分である。このほか、第3章には「シロッコとその仲間たち」や「チロルのフェーン」など気候誌的な読み物も収められていて、この方面での著者の趣味が生かされている。

本書を手にする読者は、硬質な論文がもつ緊張感とは異なって「周辺」特有の安らぎの気分を味わうことができるだろう。今後とも著者の才能を最大限に生かした随想や解説を書きつづけてもらいたいし、また準備中とかの気象学史に関連する文集にも期待したい。

(木田秀次)

構造物の耐風性に関する第5回シンポジウム

プログラム

第1日：12月5日（火）

9.00～9.10 開会の辞

構造物の耐風性に関する第5回シンポジウムプログラム運営委員会委員長

東京大学 鷲津久一郎

司会：塩谷正雄（日本大学）

9.10～9.40 招待講演 1

相馬清二

竜巻ならびにその同類現象について

9.40～9.50 休憩

9.50～10.55

1. 昭和53年2月28日東京地方を襲った竜巻について
京都大学 光田 寧, ○文字信貴, 日本大学 岩谷祥美, 京都大学 西岡淳一

2. 強風時における風の乱れの空間分布について
京都大学 光田 寧, ○塚本 修